

ARTFORLIFE

NPO法人ライフスキル研究所 lifeskill-npo.org/

Vol.47/November 2013

ライフスキル研究所のコア事業のひとつアートスペース子どもべやは 35 年を超える活動実績があります。ここを巣立ったかつての子どもたちは今どんなふうに生きているのでしょうか？卒業生にきくシリーズ第1弾は、義肢装具士の藤林翠さんにお話をうかがいました。

美しく歩く瞬間にたちあう

アートスペース子どもべや卒業生にきく①

藤林 翠(ふじばやし みどり)さん【義肢装具士】

ある日教室で私と5~6人の子どもたちが「将来の仕事」について話し合っていた時、当時小学6年生だった藤林さんは、「同じことの繰り返しの仕事はしたくない」とはっきり意見を述べました。普段は聞き役で、あまり自己主張するほうではなく、庭のガレージの上で男の子たちが段ボール小屋を作って特別な空間で遊んでいるのをうらやましく思いながら眺めていたそうです。そんな彼女がとても明確に意思を述べたことが印象深く、私は彼女が将来どんな仕事に就くのか、ひそかに関心を持っていました。

絵の教室「子どもべや」は、彼女が唯一続いたおけいこだったそうです。心に残っているのは、「教室に来て最初にやった作業で、9分割した台紙に好きな色紙を貼り込むこと。それを見て先生がその日の気持ちや気分を問いかけてくれた。そこでは自分の意見が言えたり、よくわからないけれど心の整理ができたと思う。」そのような中で彼女は表現に親しむ少女として成長していきました。

やがて時が過ぎ高校2年生。進路を考える時期になり、大学と専門学校両方の資料を眺めながら、どこに自分のしたいことがあるのかと自問した時、ある専門学校のカタログが目にとまり、体験授業を受けたそうです。1時間半の実習でプラスチック義足の型を取る作業でしたが、この後どうすれば義足ができあがるのかもっと知りたいという興味が湧いたといいます。

中学2年で父の死を体験し、その衝撃から描きかけのキャンバスを真っ黒にぬり込めた彼女でしたが、母の背中を見ながらいつしか「ちゃんと働くことは当たり前」と職業への心構えができていました。卒業後、義肢装具士の道へ進むことを決め、神戸医療福祉専門学校で3年間学んだ後、義肢製作工房に6年間勤務、現在は母校で実習指導者として働いています。

「義足が完成し装着した時、当事者の方々のお気持ちはどうなのでしょう?」という問いに、「喜びよりも欠如感と違和感の方が強いのだと思います。他人事のように受け止められる方がほとんどです。患者さんの顔に笑顔が戻るのはリハビリが進み、階段の上り下りができるようになってからですね」とのことでした。「それでは患者さんの気持ちに同化して、あなた自身が落ち込むこともあるのでは?」と尋ねると、「それは



実習指導をする藤林さん(右)

ありますが、歩けるようになるまでソケットが適応しているかどうかの確認や組み立てのバランス、長さの調節が続き、やがて患者さんが美しく歩ける姿を見た時は本当に嬉しい。また歩けるとは思わなかった…とおっしゃる患者さんの言葉が」。

美しく歩ける—この言葉に私は心の中で快哉を叫びました。仕事を通して培われた彼女の美意識の在処を感じたからです。この美意識が彼女の職業的倫理観を高め、勤労意欲を支えているのでしょう。

喪失の痛みを持つ患者さんと向き合うこの仕事は、痛みを分かち持つ共感性と同時に、感情に流されずに失われた身体機能の回復・再生を手助けする使命が託されています。6年生のころ彼女が描いた樹木画が脳裏に浮かびました。大きいけれど線は細く頼りなさそうに立っていたあの木が、今ここにしっかりした成木に育ったのを確信しました。アートという樹が彼女の中に根付いているに違いありません。

美意識は生活の質を高める—アートスペース子どもべやの信条です。さらに彼女の仕事に期待したいと思います。

(聞き手:小村チエ子/ライフスキル研究所理事長)

活・動・色・彩

～かつどういろいろ～

池田市内の生活介護事業所こすもすで毎月1回アートタイムを行っています。昨年度トライアルで実施し、今年4月から定例で始まりました。同事業所の通所者約20名の方々と一緒にいろいろなアートワークにチャレンジしています。

毎回どんな反応をされるか私たちスタッフもドキドキなのですが、ノリノリで参加者の創作が進む時、いつもと違う参加者の一面にふれた職員さんが「この方にこんな一面があったんですね！」と嬉しい驚きの声を上げてくださる時は、手ごたえとやりがいを感じる瞬間です。参加者の方々と絆らしきものもできてきました。いずれここから新たな巨匠が生まれるも！との期待も込めて取り組んでいます。



10周年イベント報告

2013年1月16日アステ川西《コンパス》

すでに2013年も年の瀬を迎えんとしていますが、、（^_^）2012年10月、ライフスキル研究所は法人設立10周年を迎えました。これを記念し、今年1月16日、ライフスキル研究所10周年&アートスペース子どもべや35周年記念イベントを行いました。

当日は理事長あいさつやゲストのお言葉から始まり、ライフスキル研究所10年、子どもべや35年の歩みをふりかえるプレゼンテーション、そして乾杯のあとはバロック・ヴァイオリンとヴィオラ・ダ・ガンバの古楽器デュオによるミニコンサート、ミニアートワークショップと盛りだくさんな内容。会場には日頃からお世話になっている方々をはじめ今は社会人となった子どもべやOB・OGや保護者の皆様、私たちの活動に関心を寄せてくださる方々にお越しいただき、温かいお言葉や美しい花束をいただきました。

1977年に理事長が絵画教室始めて35年、2002年の法人化から10年。その時々に見えてくる課題に向き合いながら、つねに自分たちの活動の意義を自問自答する日々でした。資金もマンパワーも不十分な中で、それでも10年続けてこられたのは、支えてくださる皆様がいたからです。時に熱い声援、時に厳しいお言葉をいただきながらやってきましたが、「これでいい」ということは決してない活動です。めざすものと現状とのギャップにたじろぐこともあります。少しずつ広がる理解の輪に手ごたえを感じながら、あらためて未来へ向かって漕ぎ出しています。

今後は発信力を強化し、創作や表現、著述などを通じて私たちの活動を形にし、より広く、より多くの人々に届けられるよう努めたいと思います。今後とも一層のご支援をよろしく願いいたします。



【編集者の弁明—いいわけ後記】

前回のニューズレターから1年たってしまいました。10周年イベント終了後すぐにも出すつもりが、主として編集担当者の個人的事情によりすっかり間が空いてしまいました… □ | ○ その間、生活介護事業所でのワークショップがスタートしたり、助成金申請を蹴られたり、ワークショップや講座・研修に出講したりと、ライフスキルは動いていました。事務所の大整理(オーガナイズ)も敢行し、事業活動の棚卸やスクラップ・アンド・ビルドにも取り組んでいます。

閑話休題。子どもべやOG藤林翠さんのお仕事、興味深いですね。なかなか知る機会の少ない職業だけに、ご本人の仕事へのモチベーションがしっかりしているように感じます。子どもたちがこの先どんなふうに出世の中へ出ていくのか。それを見守り、手助けするのは、大人そして社会全体の大切な責務ですね。未来を担う子どもたち、そしてまさにライフスキルの今を支えてくださる会員諸氏の多彩なスキルを活かし、社会的事業へと繋いでいくことも大切なミッションです。どうかご支援ご協力のほどを！（MK）

発行：特定非営利活動法人ライフスキル研究所 〒563-0017 大阪府池田市伏尾台 1-32-17

E-mail info@lifskill-npo.org Tel 072-750-2797 Fax 072-750-2805 HP <http://lifskill-npo.org/>